ISO フォーラム実施報告書

執筆：ISO 事務局 情報メディア学科 3 年 池田飛鳥
ISO 事務局 環境情報学科 1 年 笠井祐奈
ISO 学生委員会 ISO フォーラム総責任者 環境情報学科 2 年 森口 純

目次

1. 概要

2. 企画報告
2-1. 報告会
2-2. 講演会
2-3. 学生企画
2-3-1. エコグッズを作ってみよう!
2-3-2. 目指せ☆ECO マスター　エコって Q!!
2-3-3. 自転車発電企画
2-3-4. 東日本大震災「私たちの手で日本の未来は変えられる」
2-3-5. グリーンカーテン企画
2-3-6. エコキャン映像企画
2-4.広報活動について

1.概要

【企画名】
第 14 回環境 ISO フォーラム

【開催目標】
学内生及び学部関係者への ISO 活動の成果報告

【開催目的】
昨年 3 月 11 日に起こった東日本大震災から 1 年以上が経過した。今尚、震災の傷が癒えぬ場所存在している。「忘れない　日本の未来　一歩ずつ」をテーマとし、未だ終わらない災害の傷跡の中で私たちはこの国の未来のためにどのように何ができるかということについて、私たちの日頃の活動も交えて伝えていこうと思う。

【開催日程】
平成 24 年度 12 月 8 日（土）

【開催場所】
東京都市大学横浜キャンパス　3 号館 31A 教室、32A 教室、4 号館学生ホール

【企画・運営】
環境教育部会・ISO 学生委員会

【当日の流れ】

内容	時間
受付開始	9：30～10：00
開会式	10：00～10：10
報告会	10：10～11：20
休憩時間	11：20～11：30
講演会	11：30～13：00

学生企画	10：00～16：00

2.　企画報告

2-1.報告会

2012 年 12 月 8 日（土）、東京都市大学 横浜キャンパス 31A 教室にて、ISO 学生委員会主催の ISO フォーラムが開催された。以下、ISO フォーラムにて行われた報告会の概要やレポート、および各責任者の先生方から頂いた感想や来年度に向けた目標などを報告する。

サイトトップによる報告

報告者：吉崎真司

役職：環境情報学部長　教授

図１　トップ画面

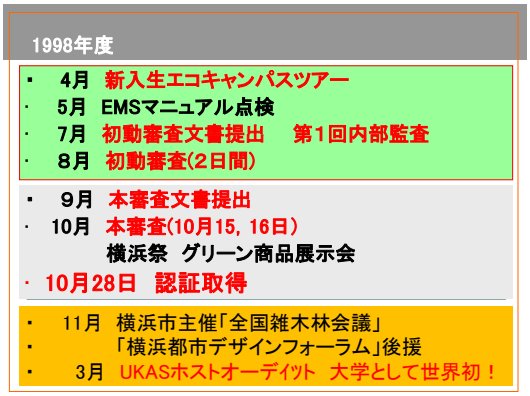


図２　ISO14001 認証の歴史

ISO フォーラムでの最初の報告者である吉崎学部長は、ISO14001 取得時の歴史と今後のことを語ってくれた。

A.本学における ISO14001 の歴史

”環境問題”の改善に貢献できる人材を育成するため、本学は 1997 年 4 月に環境情報学部を開設した。開設後、環境に関する様々な取り組みに挑戦し、1998 年 10 月 28 日に教育機関として、初の ISO14001 を取得した。

B.新学部誕生

2013 年 4 月から新学科 ”環境学部”と”メディア情報学部” が誕生する。今までよりも専門的な学生を育成しようと言うのが狙いだ。高い専門性を持つ２つの学部がお互い相互に協力しながら、今日の社会問題の発見、解決に取り組んで行く。

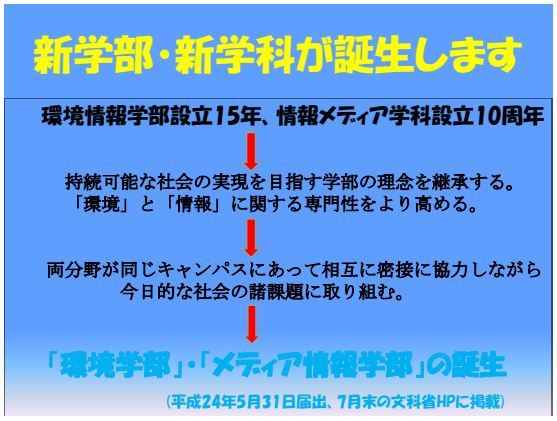


図３　新学科の誕生

C.吉崎学部長のメッセージ

図４　学生企画に参加している様子

来年度から新学部編制が行われる。それにともなって、”メディア情報学部” は、ますます環境から離されて考えられてしまう。しかし、その時こそ ISO14001 の構成員・トップランナーとしての自覚を持ち、横浜キャンパスの ISO14001 や環境、PDCA サイクルがいかに自分たちにも必要なことなのかを両学部に今以上に知ってもらう必要がある。そのためには今まで以上の新しい活動や、現在の活動の改善が必要だ。例えば、ISO 学生委員会が行っている”エコキャンパスツアー”などの企画もメディア学部と環境学部の両用に作事があげられる。

「最初が肝心」

来年度に向けてこの言葉を胸に、新入生を迎える準備をしなければならないと、吉崎学部長は語った。

環境管理責任者による報告

報告者：佐藤真久

役職：環境管理責任者　准教授

図１　トップ画面

二人目の発表者は、環境管理責任者の佐藤先生による発表だ。ISO14001 について、本学の取り組みを交えて説明を行った。

A.本学における ISO14001 の位置づけ

本学は日本で始めて ISO14001 を取得した教育機関である。よって、今後はその維持はもちろんのこと、日本のトップランナーとして、他大学に大きな影響を与えていかなければならない立場にある。

図２ 認証結果と登録範囲

B.本学における ISO14001 の評価の特徴

ISO14001 における評価は、大きく分けて２点ある。“直接影響評価”と“間接影響評価”だ。特に教育機関である本学の特徴は、間接影響評価を主体として活動していることである。

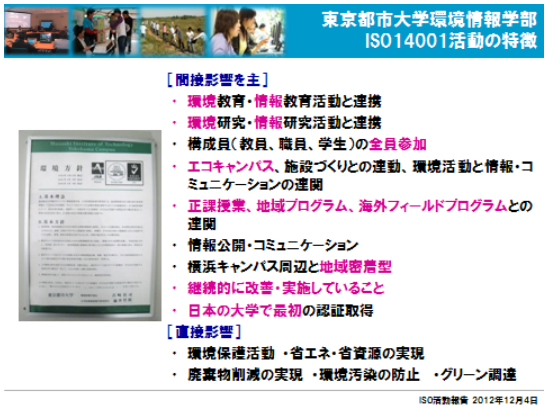


図３ 間接影響評価

C.佐藤先生からのメッセージ

「８月に行われたサーベイランス審査では、特に学生が主体となって様々な活動を行なっていることが大きな評価を得ました。」

図４ サーベイランス審査の様子

本学は、“学生・教授・職員“が構成員という日本でも珍しい形をとっている。よって構成員の 95%である学生が主体的に動くことは、審査においてかなりの高評価を得ることができのだという。その意味では、ISO 学生委員会を中心とした、環境団体の働きは大きい。また、「PDCA サイクルはスパイラルアップの構造をとっています。つまり、次世代に繋げなければ意味がありません。教育というものも立派な評価になるのですよ。」 ともコメントしてくれた。現状まだまだ問題点も多い本学の主構成員である学生に対して、しっかりと問題点を伝えていくこと、その問題点に対して世代をつなげて改善していくこと。そのコミュニケーションの方法をみんなで考え、学校全体をスパイラルアップしていくことが、今後もトップランナーとして ISO14001 を維持できるかどうかの境目だと、佐藤先生は語ってくれた。

図 5. 学生と意見を交換する佐藤先生

省エネルギー部会による報告

報告者：リジャル・ホム・バハドゥル.

役職：省エネルギー部会長　准教授

図 1 発表者のリジャル先生

省エネルギー部会の設立の目的は、”エネルギー使用の実態把握”と、”省エネルギー意識の向上”の 2 点である。その省エネルギー部会の部会長であるリジャル教授からは、本学の省エネルギー活動に関する報告を行なってもらった。

A.具体的な活動

主に行った活動は、以下の 7 点である。

① 参加型省エネルギー実験として壁面緑化実験
② グリーンカーテンの設置
③ 人成員・地域への呼びかけ
④ 省エネ活動
⑤ シーリングファンの設置
⑥ 成果物（報告書、論文）

この①～⑦の活動について、簡易的に報告する。

①について

図 2 継続的電力測定

本学 2 号館と 3 号館に測定器を設置している。2009 年度から諏訪研究室によって、電力の可視化を行い、外部の人にも視覚的にデータが見えるようになっている。

②、③、⑤、⑥について

図 3 壁面緑化プロジェクト

ISO 学生委員会および GreenDays による壁面緑化プロジェクトが 2011 年度から行われ、その結果を元に今年は 2 号館にグリーンカーテンを設置した。

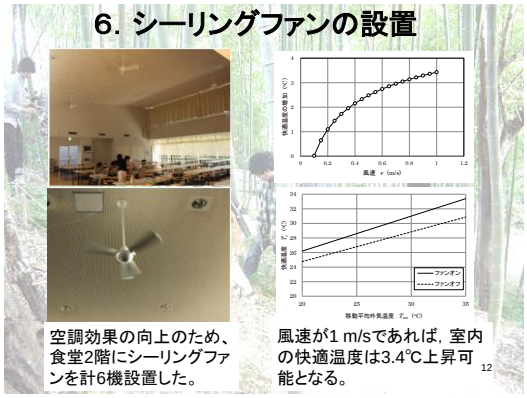


図 4 シーリングファンの設置と効果

④、⑦について

ホームページの広報や地域の人への呼びかけを行うことで、省エネルギー意識の向上をはかり、その活動結果の報告や、論文などの成果物を発表する事で、内部での意識向上にもつながっている。

図 5 広報ポスター

B.リジャル先生からのメッセージ

「もっと学生と一緒に省エネルギー活動をしたいですね。」今回インタビューの中で、リジャル先生が今後の課題に上げてくれたのは、いかにして教授と学生との距離を縮めるかということだった。確かに現在の活動を見てみると、”学生は学生”、”教授は教授”と同じ部会にもかかわらず、お互いに関与していないことが多い。今後は学生から教授を巻き込もうという力強さが今まで以上に必要になってくるとリジャル先生は語る。学生の“活動力”と教授の“知恵”をあわせた、より質の高い PDCA サイクルを行うことが課題となるだろう。

環境教育部会による報告

報告者：室田昌子.

役職：環境教育部会長　准教授

図１ 発表者の室田先生

環境教育部会は、構成員の環境に関する知識の向上を行うために、企画・運用を行う機関である。教育部会長の広田先生からの報告をここに記す。

A.具体的な活動

今年度の活動は以下の 10 点である

①ISO 教育活動の推進

４月：新入生対象エコキャンパスツアー
（新入生全員）

６月：エコキャンパスツァーの準備練習会

８月：オープンキャンパス

９月：オープンキャンパス

②環境 ISO フォーラムの開催

③緑地保全活動の推進

４月初旬：春の筍掘り：

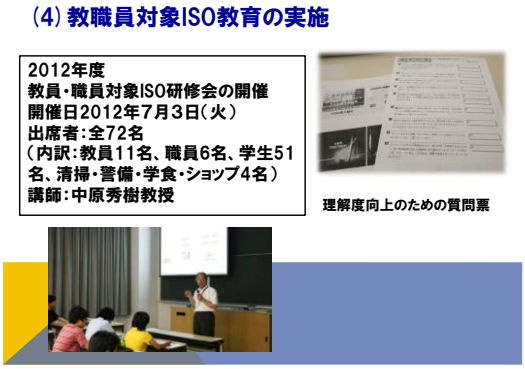
定例：緑地保全定例活動

定例：バタフライガーデン

定例：花壇の整備

定例：現代ＧＰとの連携による

④教職員対象環境 ISO 教育の実施



⑤学外授業支援

見学先①：水再生センター

見学先②：清掃工場

見学先③：コンテナターミナル

⑥環境フィールド研修プログラム

熱帯雨林保全プロジェクト

⑦環境 ISO 関連卒業成果集作成

⑧カーボン・オフセットプロジェクト

⑨牛久保西みどりのまちづくりプロジェクト

⑩正課カリキュラムの関連づけと PDCA

B.室田先生からのメッセージ

「来年度へ向けて体制を考えると良いかも知れません」どんな活動でもよく問題は、“一人で全て背負ってしまう人が出てくる”ことだ。特に今回の ISO 学生委員会は室田先生から見て、それが顕著に現れたよう

だ。一人で背負い込むのではなく、みんなで分担してこなしていくことが大切である。一人で抱え込んでいる人をいかにフォローし、情報発信を出来るようにするか。まずは自分たちの組織の基盤を固めることから始めるのが良いというのが、室田先生の考えで合った。

環境管理部会による報告

報告者：郭 偉宏.

役職：環境管理副部会長　教授

図１　発表者の郭先生

環境管理部会は、ISO14001 規格の要求との整合性をとることによって、環境マネジメントシステム全体の円滑な運営を図ることを目的とし、活動する。その環境管理副会長の郭先生からの報告を行ってもらった。

A.具体的な活動

主に行った活動は以下の③点である。

①騒音測定

②キャップ回収

③勉強会

①騒音測定

騒音の監視(2012年)

測定箇所	測定機器 No.	横浜祭時(6 月 3 日)		通常時(7 月 7 日)	
		平均	最大	平均	最大
正門	1	50.7	55.3	49.1	64.5
	2	51.0	52.7	50.1	61.7
	2 つの平均	50.9	54.0	49.6	63.1
通用門	1	46.9	51.8	60.0	60.9
	2	48.6	59.7	61.5	64.1
	2 つの平均	47.8	55.8	60.8	62.5
車両門	1	59.6	63.3	59.9	65.2
	2	61.1	66.9	61.0	66.6
	2 つの平均	60.4	65.1	60.5	65.9

図２　騒音測定の表

横浜祭で騒音の実態を把握するため、横浜祭開催前後に騒音測定を行っている。本学での自分たちの活動が周辺環境にどのように影響を与えているかを管理することを目的としている。

②キャップ回収

回収されるキャップは、800 個で１つのワクチンに変えられ、貧しい子供たちに送られるシステムになっている。管理部会は、このキャップの回遊量の推移をまとめ・掲示することにより、本大学でキャップが分別され、ワクチンに変えられているかを確認する。

図３　キャップ回収

③勉強会

図４　勉強会

ISO 学生委員会内の、環境意識向上を図るとともに、組織としての意識を身に着けることを目的として年に数回行われる。第一回目は”ISO 学生委員会について”という題目で、なぜ ISO14001 は作られ ISO 学生委員会は創設されたのかを、1 年生中心で行った。

B.郭先生からのメッセージ

「ISO を継続するという事は、書類的だけではなく、行動も伴う物にするべき」
と郭先生は話す。継続するという事は、ISO を維持して運営するということだが、それだけではどうしてもマンネリ化してしまう。しかし、それを学生たちの発想力や行動力によって、新鮮味を保つことができる。
現状は、先生同士や、学生同士の繋がりも弱いのだという。
「学生が先生方を巻き込んで、常に新しいものに取り組めたらと期待している。」
加えて、
「遠慮なく先生を訪ねてほしい」
と話す。新年度まで残された日は少ない。ISO 学生委員会の今後の課題は、その新入生たちに、ISO14001 や活動を伝えていき、しっかりと次に引き継げるようにすることである。そのためにも、自分たちから積極的に多くの人を巻き込もうという力強さが、改善に繋がる一つの方法になるだろう。

省資源部会による報告

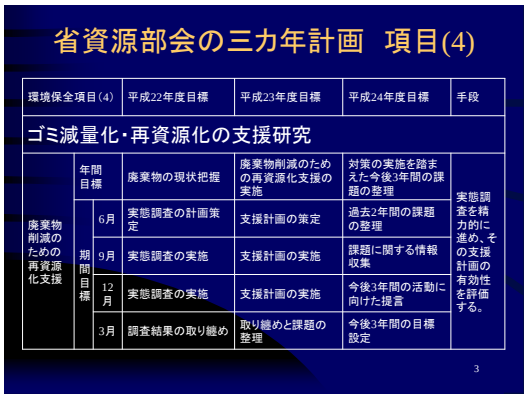
報告者：山崎瑞希.

役職：省資源部会長　准教授

図１ 山崎先生による発表

省資源部会は、３ヶ年計画を立て、それに従って資源を一歩一歩確実に減らしていくことを目的としている。

3R を元にした活動を山崎先生から報告して貰った。



省資源部会の三カ年計画　項目(4)

環境保全項目(4)			平成22年度目標	平成23年度目標	平成24年度目標	手段
ゴミ減量化・再資源化の支援研究						
廃棄物削減のための再資源化支援	年間目標		廃棄物の現状把握	廃棄物削減のための再資源化支援の実施	対策の実施を踏まえた今後3年間の課題の整理	実態調査を精力的に進め、その支援計画の有効性を評価する。
	期間目標	6月	実態調査の計画策定	支援計画の策定	過去2年間の課題の整理	
		9月	実態調査の実施	支援計画の実施	課題に関する情報収集	
		12月	実態調査の実施	支援計画の実施	今後3年間の活動に向けた提言	
		3月	調査結果の取り纏め	取り纏めと課題の整理	今後3年間の目標設定	

3

図１ 年間活動計画

A.具体的な活動内容

行なっていることは、以下の３点である

①分別回収、混在率調査

②紙回収ボックスの改善

③econote（えこのて）

①、②について

分別回収の研究を行なっている。ゴミの混在率を調査し、混在率削減のために、よりわかりやすい分別方法の検証を行なってきた。特に今年の特徴を上げると、次の２点があげられる。

・情報メディアセンターの印刷ミスの回収ボックスの改善を行ったこと

・YC ショップ設立のため、混在率が一時的に上がったこと

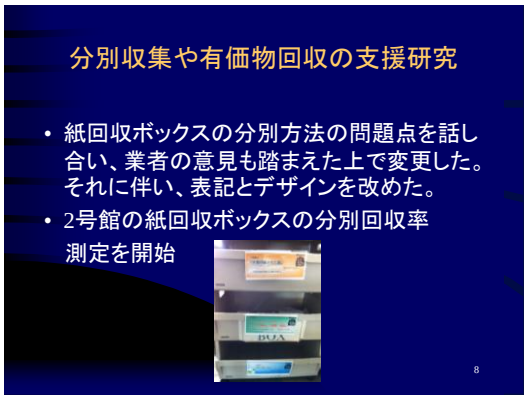


図２ 紙回収ボックスの改善

YC ショップの設立によって、学生の学内ライフスタイルが大きく変わったため、以下に YC ショップの資源を削減するかが今後の課題である。

③econote（えこのて）について

econote の作成は、３ヶ月に一回程度の周期で行われている。印刷ミスをした紙で、個人情報が入っていないものを２舞い降りにしたものを、紐で結ったものが econote である。一部で大体 A4 用紙 15 枚分あり、学生間でかなり好評である。

今年の econote も、作りおきしてから①週間程度で全て無くなったので、今後も続けていく方針だ。

B.山崎先生からのメッセージ

「ゴミの混在率をいかにして減らすか、今後は知識と行動のギャップを調査しようと思います」

山崎先生は、なぜゴミが混在しているか、その根本的な問題の解決方法として、アンケート調査を提案してくれた。ゴミの分別の間違え方は 2 通りある。捨ている人間の意識が低い場合と。知識が低い場合だ。前者は環境意識を向上させることで解決できるが、山崎先生は特に後者に関して調査が必要ではないかと語られた。

具体的には、混在率の高かったゴミの写真を集め、それを問題形式としてアンケート調査を行い、正解率を算出する。このような教育を行えば、今後さらにゴミの混在率が減るだろうという仮定の元で、来年以降更に高い目標を掲げて、行動をしてく予定だという。

また、個人的な意見として、“econote”がお気に入りというコメントも頂いた。

「個人的には、私も”econote”作ってみたいです。情報メディア学科を巻き込むためにも、ゼミの人と協力して作ってみるとか面白そうじゃないですか？」

かなり省資源活動に対して、積極的な考えを持ってくれている山崎先生。唯一の情報メディア学科の部会長であるが、その意識は環境情報学科の教授にまったく引けをとらなかった。次回は更新審査が入り、部会責任者は交代するが、もし情報メディア学科の教授が部会長になっても、山崎先生のように積極的に活動してくれれば、本学の「情報と環境の融合」を基盤とした ISO14001 の活動を上手く回すことができると、今回のインタビューを通じて強く実感することができた。

2-2.講演会

A.目的

千葉県野田市の市長である根本崇氏は、「防災対策と安心安全なまちづくり」を政策としてかかげ、市民の立場に立った対策を行うと共に、東日本大震災後には、被災した地域の若者の就職援助を行うなどさまざまな防災への取り組みを行っている。これらの取り組みが、第 14 回環境 ISO フォーラムのテーマである「忘れない　日本の未来　一歩ずつ」に関連しており、この講演を聞くことで、震災から１年９ヶ月経過し、忘れかけていた防災への意識を学内生へ再度芽生えさせることが目的である。

B.講演者紹介

1945 年生まれ。東京大学法学部卒業後、1970 年４月建設省入省。その間、千葉県水政課長、静岡県島田市助役、建設省大臣官房政策企画官、関東地方整備局用地部長などを務める。1992 年、野田市長に就任、現在に至る。「自然環境保護対策基本計画」の策定や「野田市貴重な野生動植物の保護のための樹林地の保全に関する条約」の施行などを通じて、野田市の良好な自然環境や貴重な動植物の保護に尽力。趣味は、タナゴ釣り。

C.内容

千葉県野田市の被災状況や、今後の防災対策、放射線等の対策について、市長自身や、市民、学生目線からの意見を踏まえ、学内生が忘れかけていた東日本大震災について思い起こしてくれた。また、野田市でのコウノトリを呼び戻す取り組みや里山の保全活動など環境対策についても話され、環境情報学部の学生にとっても興味深い講演だった。

図１ 中村学長のご挨拶

図２ 講演の様子

図３ 集合写真

2-3.学生企画

2-3-1.エコグッズを作ってみよう!

責任者：環境情報学科１年　佐伯 尚哉

【目的】
ごみとして捨ててしまうような身近なものでも少し工夫すれば、まだ使い道があるということを伝え、環境に対する意識の向上と循環利用の大切さを知ってもらう。
また、エコグッズ作製と＋αで、プロのアーティストが作製したリサイクルアートを展示、紹介も同時に行う事で、3R(リサイクル)の重要性を伝える。

【内容】
・エコグッズの作成、配布
1、包装紙　→　ブックカバー
2、新聞紙　→　エコバック
3、紙パック →　ハガキ・栞
(配布:ハガキ、栞、ブックカバー　当日作成:新聞紙から作るエコバッグ)
・リサイクルアート(廃棄もしくはリサイクル回収されている使用済の資源、商品を材料とした芸術作品)の展示

【場所】
４号館２階学生ホール

【考察】
呼び込みによる集客も良く、また材料不足には至らなかった。内容としては、特にリサイクルアートが好評だったことが今回の一番良かった点だと感じる。
しかし、はがきの作り方が準備不足だったことや、エコバックの作り方の紙を配布し忘れた所は失敗点であった。
次回への改善点としては、準備にさらに力を入れると共に、エコバックやはがきのデザインにもこっていきたいと思う。

2-3-2 目指せ☆ECO マスターエコって Q!

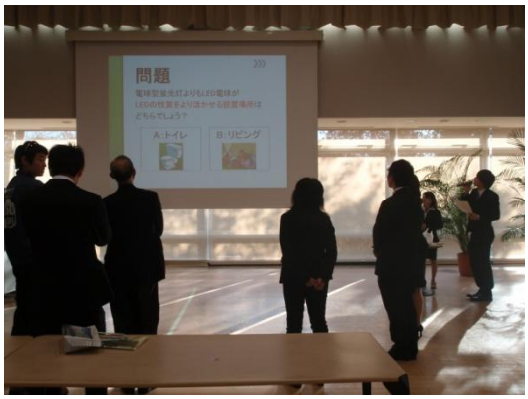
責任者：環境情報学科１年　岡村 和季

【目的】
家庭でできる節電方法やごみの分別などの身近な知識と知恵をクイズによって広めることにより、私達の生活態度を改め、省エネルギー･資源循環型社会の形成を促すこと。

【内容】
身近なエコ知識に関する二者択一のクイズをスクリーンに投影し、参加者は正解だと思う選択肢の場所へ移動して回答した。参加者には菓子を参加賞として配布した。

【場所】
４号館２階学生ホール

【考察】
学生ホールで行われた学生企画の中で、スクリーンを使用するということもあり、最もスペースを使用していたため、学生の目を引きつけることが出来た。
しかし、この好条件にも関わらず、参加者の数が集まらなかったのは、宣伝や呼び込みのやり方に問題があったといえる。
宣伝や呼び込みのやり方も、クイズを作成するのと同様に力を入れていかなければならないと感じた。



2-3-3.自転車発電企画

責任者：情報メディア学科１年　小畑 遼平

【目的】
東日本大震災から一年以上が経ち節電を呼びかけているが、震災直後に比べて徐々に意識が弱まってきている。そのため、来場者に自転車発電を体験してもらい、電気の大切さを知ってもらうことにより、一人一人の節電の意識を高めてもらう。また、自分たちが企画することにより、私たちの節電意識も向上させたい。

【内容】
自転車を使って発電してもらう企画

・発電を体験してもらう際にどれだけこげば、どのくらい発電できるか可視化できるような参加型・体験型する
・電化製品のそれぞれのワット数を書いてあるパネルを設置してそれに相当する自転車発電量を示しておく
・参加してくれた人全員に参加賞としてお菓子を配布する

以上のように来場者にもメリットあるものを用意しておく。

【場所】
３号館前の入り口付近

【考察】
当日テントを張っていたが、想定外に風が強かったためテントをたたんで行った。そのほかのセッティングに関しては問題が起きることなくスムーズに準備することができた。
問題は、事前の他の企画の連絡不足である。特に発電企画は他の企画とは違い屋外で行ったもので、特に当日の情報共有が難しい。事前にすべての情報を知ることが出来なかったのは大きな反省点といえるだろう。
他にも、様々な理由から他企画に迷惑がかかる可能性を考慮して、屋外で企画を実施したが、12 月ということもありかなり寒かった。風よけやその他起こりうる事象を準備段階から予測して準備しておくべきだった。
一番の問題点は、やはり集客率の悪さであろう。色々と問題が浮かび上がっているので、１つ１つ解決して次回に繋げたい。

【当日の風景】

① 発電を体験

② 発電量の確認

③ 実際に使用した、発電機とラジカセ

2-3-4.東日本大震災「私たちの手で日本の未来は変えられる」

責任者：環境情報学科１年　桑島 航汰

【目的】
東日本大震災の悲劇を忘れさせないための企画である。この企画を通じて少しでも多くの学生に未だ癒えぬ大震災の傷が残っていることを伝える。

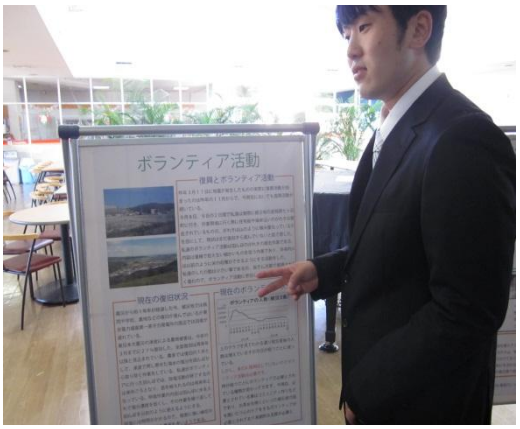
【内容】
・展示を中心に東日本大震災によって引き起こされた事故や被災地の現状の事を「福島、原発」「岩手、宮城」「被災地の動物」「ボランティア」の４つに分け、パネル展示を行う
・集めた写真をアルバムにまとめ展示する
・当日の来客者にパネルにまとめきれなかった事を説明する

【場所】
４号館２階学生ホール

【考察】
実際に被災地に行ったことにより、多くの情報を得ることが出来た。よって、説得力のあるパネルを作成することが出来、来場者に具体的な内容を伝えることが出来た。教授たちの評判も上々だ。
今後の反省点としては、写真展示のレイアウトを改善することで、更にわかりやすいものを提供すること。
ボランティア同士の話し合いの場を増やすことで、更に室の高い内容を突き詰めていく事があげられる

【当日の風景】

本番前、パネル説明の練習①



本番前、パネル説明の練習②

本番前、パネル説明の練習③

本番、来客者にパネルと写真の説明

2-3-5. グリーンカーテン企画

責任者：環境情報学科２年　千野 洋平

【目的】
３月 11 日に東日本大震災が発生し、日本に所在する全原発が停止する事態が発生したため、電力不足がとりただされた。そこから 1 年が経過した今年の夏も日本全土で電力不足が問題となった。来年の夏も電力不足となる可能性が大きい。そこで、夏の電力を抑える効果のあるグリーンカーテンについて知ってもらうことで、来年の夏を乗り越えてほしい。また、このような企画を行うことによってどのような結果が得られるのかアンケートを行い、データを集計・数値化することにより改善への道しるべとする。

【内容】
学生自ら作成した展示パネルやグリーンカーテンに実ったヘチマでたわしを作成したものを展示したり、また今年の 4 月～12 月までの成長記録をパワーポイントにまとめ、ブース内で放映した。　展示パネルに関しては説明員が付き説明できる体制をとった。

【場所】
東京都市大学　横浜キャンパス　食堂棟２階学生ホール

【考察】
今回この企画は、突然の変更が重なり学校側、ISO 学生委員会にご迷惑をお掛けした。本来であれば、目的・企画の大まかな構成は時間を掛けて練ってゆく必要があったにもかかわらず、約 2 ヶ月という短い期間で遂行してしまった。そのため、企画の目的・構成に不備が見られたと感じた。そして、フォーラムグリーンカーテン反省会に至っては、当日参加人数が少なかったが、反省・課題となる意見が多く出て、次の企画に生かせるようなものがあった。
今回の反省会で上げられたものをいくつか挙げてみると、悪かった点の例として、

展示パネルを作成した際の敲きがなかった、企画のスタートが遅い、グリーンカーテンの写真が少なかった、などといった基本的なことができていないことが目立った。これはやはり、企画準備に使用した時間が少なかったという理由もあげられるであろうが、本質は自分から動くという積極性が欠けていたもしくは、誰かがやってくれるだろうというような気持ちが心のどこかしらに存在していたからではないかと考える。
だが、約 2 ヶ月という短い期間にもかかわらず企画が完成することができたのは、各々与えられた仕事を締切期日までにしっかりと守り、仕事状況の現状報告や面白いアイデアを提供してくれた、忙しい中参加してくれた参加者のおかげであると実感している。

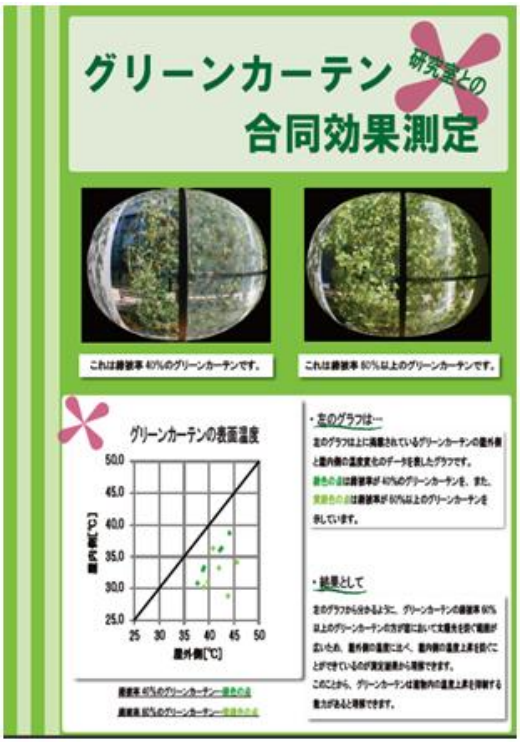
【当日の風景】

図 1
当日のフォーラムグリーンカーテン企画のブースである。

図 2
グリーンカーテンの成長記録をパワーポイントに放映している

図 3
図 3 はグリーンカーテンに実ったヘチマを使い、たわしを作成した写真である。

【以下展示パネルデザイン】



6. エコキャン映像企画

責任者：環境情報学科２年　内島 静香

【目的】

本学はISO14001を取得しており、キャンパス内にはエコスポットが多く存在している。しかし学内生はこの内容を知らないという人が多い。毎年、新入生に対しISO学生委員会員がエコキャンパスツアーを行ってはいるものの、その内容を覚えている人は少ないのが現状である。本学は学生もISO14001の構成員であるので、このことは大きな問題ではないだろうか。そこで、環境ISOフォーラムという学内生が集まる数少ない機会において、学内のエコスポット、キャンパスの環境への取り組みについて再度、またはより詳しく、構成員の生徒皆さんに知っていただき、学内の環境意識を高めることをこの企画の目的とする。

そして今年のテーマである

「忘れない　日本の未来　一歩ずつ」

にあるように、エコキャンパスの環境への配慮を知ることで、節電などの啓発になればと考えている。

またこの企画を実施･成功させることによって、ISO14001の監査を無事通過することへの手助けになれば幸いである。

【内容】

エコキャンパスツアーの映像化である。各エコスポットを当委員会が自分たちで絵コンテを作成・撮影し、第14回環境ISOフォーラム学生企画の場で放映した。

【場所】

学生ホール

【考察】

映像編集に不慣れであったことや映像の完成が予定より遅れてしまったことにより、大規模な放映は行わず、ブースは小ぢんまりとしたものであったが、次回撮影を行う際には今回の映像作成が必ず参考になるであろうし、もっと良いものを作りたいという意気込みも生まれた。

今回のフォーラムでのこの企画の反省を活かし、次回につなげていきたい。

２－４．広報

責任者：環境情報学科２年　安齊 薫

【目的】
環境 ISO フォーラムの広報を行う。今回は、学内生への広報に力を入れ学内生の環境 ISO フォーラム参加を促す。このことにより、構成員である学内生へ、横浜キャンパスの年間環境活動の報告と環境意識の向上を促すことを目的とする。尚、学内生に広報の対象を絞った理由としては、学内生は横浜キャンパスの構成員のうち約９割を占めるため、学内生をターゲットとし広報を行うことが最も効果があると思われるためである。

【内容・設置期間】
広報物として以下のものを使用した。
・簡易告知ポスター
・詳細ポスター
・ポップ
・ログオン画面
・当日配布パンフレット
・ブログ告知
・学内放送

ここでは企画書に記載していないブログ、学内放送、ホームページの３つを説明する。

①ISO 学生委員会公式ブログについて
ISO 乃家（イソノケ）を使用しネット上で簡易的なフォーラム告知と報告を行った。形式的な報告書とは異なり、学生ならではの形で情報発信を行えるブログは今後とも有効活用していくべき媒体といえる。

②学内放送について
フォーラム一週間前である 12 月３日～7 日まで学内放送でフォーラム告知をおこなった。

③ホームページの件について
ISO 学生委員会では公式ホームページを所有しており、そこでの環境フォーラムの告知を行った。特設フォーラムサイトを ISO 事務局の方と共同で作成し、ネット上でさらなる広報を図った。またフォーラム報告についてもこちらで行う予定である。

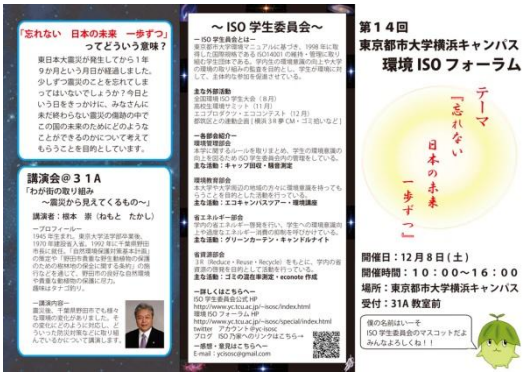
【考察】
今回の環境 ISO フォーラム（以降フォーラム）では、広報部会員は全員が掛け持ちという状態であるためメンバーの負担は大きかった。また広報部会という名前ではあるものの正式な部会ではないので各企画、部会との連携が難しく難航する面も多々あった。しかし去年よりも積極的な広報を行えたということは大きな前進といえる。
今後の課題として、広報というものがフォーラムを含む各企画において重要な要素であることを踏まえ、広報部会という集まりの明確化、広報担当者が充分に広報に時間を費やせるケア、広報部会のフォーラムにおいての仕事の明確化と線引き、フォーラムコアメンバーにおいてのフォーラム関係者の導入など、来年に向け早急に新たな仕組みを構築していく必要がある。

【以下広報成果物】

ログイン画面

ポップ

告知ポスター



パンフレット(表)